

過日、「挑戦! 朗読中国語」という2005年に出版された中国語講座のテキストをめくっていると、「揚州遊記」という課に揚州市を紹介した文章が目に入った。今回はまだ一度も訪れたことがない、2500年の歴史を誇る「揚州市」について書き綴ってみたい。

江蘇省の省都・南京市の北東約70kmのところに位置する同市は、以前井上靖の小説「天平の薨」を読んだとき、いつかその地をこの目で見たいと思っていた都市である。改めて読み直すと、鑑真(688年～763年)の生きた時代の揚州市について、〈揚州は長安、洛陽の二京に次ぐ大都會でここには大都督府が置かれ、淮南道採訪使^{わいなんどうさいほうし}¹⁾が常駐していた〉と書かれている。日本に置き換えれば、東京、大阪に次ぐ名古屋のような位置付けであったのであろう。

ではなぜ二京に次ぐ大都市となったのか。それは隋代(589年～618年)の第2代皇帝、つまり暴君で有名な「煬帝」^{ようだい}²⁾が権力に物を言わせ、北京から杭州までの大運河を掘削させたことによるであろう。

次の唐の時代(618年～907年)に入り、この運河により江南の豊かな物資が長安(西安)や洛陽に直接運べるようになったため、一気に交通の要衝になり人と物が集まり殷賑を極める街に変貌した。つまり二京に次ぐ大都市と言われるようになって行ったのである。また大運河の建設は、長い間分裂状態であった中国を統一するため偉大な貢献をした。東



現在も中国の大動脈として利用されている「京杭大運河」^{けいこうだいうんが}
中国の北京から杭州までを結ぶ、総延長2500キロメートルに及ぶ大運河である。(写真は、全て中国版雅虎より)^{ヤフー}

流する大河で分断された国土をまとめやすくしたのだ。唐朝は紆余曲折はありながらも300年続いたのもこの運河のおかげと言っても過言ではないのではないか。

一方で、隋はこのような大規模工事への人民の強制的な労役と三度に渡る高句麗への遠征(いずれも失敗に終わった)が人民の反発を招き、各地で反乱が起きてわずか30年で滅ぶことになった。政権末期に反乱を避けるため煬帝は、首都の長安から13歳のわが子を連れこの揚州に逃げてきた。だが618年、故郷長安への帰還を望む近衛兵によって殺害されるに至った。



実は昨年(2013年)3月、揚州市内の工事現場で小さな古代墳墓が発見された。その後の調査で同年11月にこの遺跡が煬帝の陵墓であることが明らかになった。10年くらい前に中国で購入した地図には煬帝の陵墓が記載されているのでおかしいと思って調べると、同市にはすでに清朝時代に認定された陵墓があり観光地となっているが、今回の発掘により本当の陵墓が明確になったと報道されている。では今までの陵墓はいったい誰のものであろうか。小さな陵墓は煬帝の最期を考える時、さもありなんと思う。いつの時代も独裁者の末路はこのようなものである。

ここで現在の揚州市はどのような都市になっているのかを見てみよう。7世紀から8世紀頃は前述の通り中国第3の大都市であった。今はどこにでもある中堅クラスの都市である。

2009年の資料で少し古いが、人口は460万人であり、そのうち市区の、つまり中心部の人口は118万人である。中国はどの都市も市域が広いのでこのようになる。市の面積は6,658km²もあり茨城県の6,095km²を上回る広さである。人口だけで見れば、日本に当てはめると東京に次いで2番目の大都会になる。

揚州市は本来、「揚州」と書かれ漢代(BC206年～AD220年)に置かれた13州のひとつであった。それが唐代に表記を「揚州」に改め、現在に至っている。隋の皇帝の姓は「楊」(初代皇帝の文帝は楊堅、2代皇帝の煬帝は楊広)なので唐がこの字を避けたのかもしれない、と勝手に思ったりしたが如何であろうか。

市の歌は、「茉莉花」である。この歌は清朝では江蘇省あたりで歌われていたらしいが、その後広く流布し今では中国全土で愛唱されている歌である。2月2日のわんりいの新年会でみんなで歌ったのを思い出す。

ネットで揚州市の姉妹都市を見ると、日本においては奈良市、厚木市、唐津市、入広瀬村(現在は町村合併で魚沼市)と四つの自治体が載っている。冒頭に記した中国語のテキストには、「揚州市は古風で奥ゆかしい都である」と書かれている。さすれば奈

良市はぴったりである。奈良市は西安市とも姉妹都市である。一般的にはこのような都市同士が縁組するのだ。

ではなぜ厚木市と提携したのであろう。厚木市には申し訳ないがどうみても古風で奥ゆかしい街には見えない。そこで厚木市役所に電話して聞いてみた。担当者から、「厚木市と揚州市は以前から小学生のサッカーの交流が続いてきたのが縁で1984年に姉妹都市となりました。今年がちょうど30年となります。」と教えていただいた。日中関係が冷え込んでいる中でこうした取組一特に小学生たちがお互いの国を理解しあっていることはとても大切なことである。厚木市に敬意を表したい。

次に改めて揚州市の観光めぐりをしよう。揚州市と言えば大運河と鑑真が脳裏にひらめくがまず大運河からはじめよう。

歴史の教科書などには大運河は煬帝が造り上げた簡単に書いてあったように記憶するが、長い年月をかけて完成したものである。大運河の掘削は紀元前486年に、臥薪嘗胆の故事で有名な呉王・夫差が揚州市の北に邗城を築き、邗溝を掘削したのが始まりで長江と淮河(約100km)を結びつけた。

その後、隋代になってすでにあった邗溝など4つの水路を結ぶ工事を初代皇帝の文帝が始めたのを煬帝が引き継ぎ完成させたもので、全長2500kmという気の遠くなる長さである。北海道から九州までほぼすっぽり入る長さであると言えば分り易いだろう。そして北京から杭州に至るあいだに海河(天津市)、黄河(山東省)、淮河(江蘇省)、長江(江蘇省)、銭塘江(浙江省)の大河川の下流域と交差する。完成は610年で以来1400年余り中国の水運の要を果たしている。完成後、煬帝はデモンストレーションとして運河に煌びやかな龍船を浮かべ行幸したりしたため、自分たちの苦役は皇帝の遊興のためだったのかと庶民の反感を買ったと言われている。

大運河は穀倉地帯の江南から食糧を北へ輸送する大動脈であったばかりでなく、南北の文化交流に寄与するとともに、歴代の皇帝が南下するときの水路として活用されその終着点は揚州であることが多かった。

そのため揚州市内の多くの建築物は皇帝との関わりを持つものが多い。例えば揚州市の南にある「高こう受みんじ寺」は皇帝の行宮でもあった。この寺は、中国で四大仏教(禅宗)寺院として有名だそうだ。端正で威厳があり、奥ゆかしい趣の建物、湖、湖心亭、いくつもの中庭などから構成されている、とテキストに書かれている。

さらに言えば、高受寺の近くを長江がゆったりと流れている。大運河も北から長江にぶつかるように流れ込んでいる。このあたりに当時「揚よう子しん津」という小さな港町があった。この町は水運の発展に伴い交通、交易の要衝に成長して行った。そしていつしか長江下流域、特に揚子津近辺を「揚子江」と呼ぶようになり、ついには長江の別名までになったのである。大運河は各時代で改修を重ね、今日の「京杭大けいこう運河」となった。

次は鑑真について書こうかと思ったが長くなりそうなので、「朱自清 Zhū Zìqīng」(1898年～1948年)について書くことにする。

揚州市の地図を眺めていたら「朱自清故居」と言うのがあった。揚州市の生まれかと思ったら、同じ江蘇省ではあるが連雲港市・東海県の出身であった。いつの時代にこの揚州市に住んでいたのかは分からない。彼は近代中国の著名な詩人であり、散文作家である。知らない人が多いと思うが、私には大げさに言えば忘れられない人である。

実は大連勤務の時、中国語教室に通ったのだが先生(大連外国語学院の学生)が、「今日は中国人が書いた名文について勉強しましょう。少し難解な文章ですが、何回かに分けて少しづつ読んでいきましょう。必ずいい思い出になるでしょう」と言って、朱自清の書いた「荷塘月色」(荷塘とはハス池のこと)という散文のコピーを取り出した。

朱自清と言う人はこの時はじめて知ったが、初めて見る彼の文章は確かに私の手に負えない文章であった。しかし毎回5～6行ずつ丁寧に教えてもらううちに私でも素晴らしい文章だということが曲りなりにでも理解できた。日常会話ばかり勉強していたが、この名文に触れさせ大連でのいい思い出を作っ

てくれた先生にとっても感謝している。

先日ある雑誌に杏林大学の千野准教授の書かれた本作品の解説記事が載っていたのを見つけたので、その一部を抜粋し、下記に紹介しておきたい。

「朱自清の作品は名文が多いことで知られていますが、その中でも〈荷塘月色〉は一篇の詩を思わせるような美しい文章で大変に有名です。中国の高校の教科書にも収録されており、〈背影〉と並んで人口に膾炙されています。本作品は作者が清華大学で教鞭を執っていた時に書かれた散文です。当時作者は清華園西院に住んでいましたが、その近隣には蓮池があり、この美しさや静けさに触発されて本作品を書いたと言われています」

彼は当初詩人としてスタートしたが、代表作である「背影」を30歳(1928年)の時に発表し、一躍散文作家としての地位を確立した。ただ、終戦後すぐの1948年に50歳の若さで早世したのは大変惜しまれることである。荷塘月色の文章の一部を紹介しつつ、大連での勉強と朱自清に思いを馳せたい。

qūqūzhézhédehéttángshàngmian, míwàng de shì tiántián de
《曲曲折折的荷塘上面、弥望的是田田的
yè zi. yè zi chū shuǐ hěn gāo, xiàng tíng tíng de wǔ nǚ de qún.
叶子。叶子出水很高、像亭亭的舞女的裙。
céngcéngdeyèzizhōngjiān, língxīngdìdiǎnzhuìzhexiēbáihuā,
层层的叶子中间、零星地点缀着些白花、
yǒuniǎonuòdì kāizhe, xiū sè de dǎ zheduǒr de, hèngrú
有袅娜地开着、羞涩的打着朵儿的、正如
yī lì lì demíngzhū, yòurúbitiānde xīngxīng, yòurúgāng
一粒粒的明珠、又如碧天的星星、又如刚
chū yù de měi rén
出浴的美人。· · · · · ·)

(つづく)

《注記》

- 1) 唐の玄宗皇帝の時代、全国を十の道に分けて淮南道採訪使という官を置いた。道内を巡視して官吏の成績を調べ、三年に一度上奏する役目を持つ。
- 2) 煬帝の名は、唐が彼の死後、勝手につけた諡号(おくり名のこと)。「煬」の字の意味は、天に逆らい民をしいたげる意。暴君で有名であるが、政権を取った唐が作り上げた評価でさほどの暴君ではなかったとの見方がある。大運河は高句麗への遠征のためとも言われている。